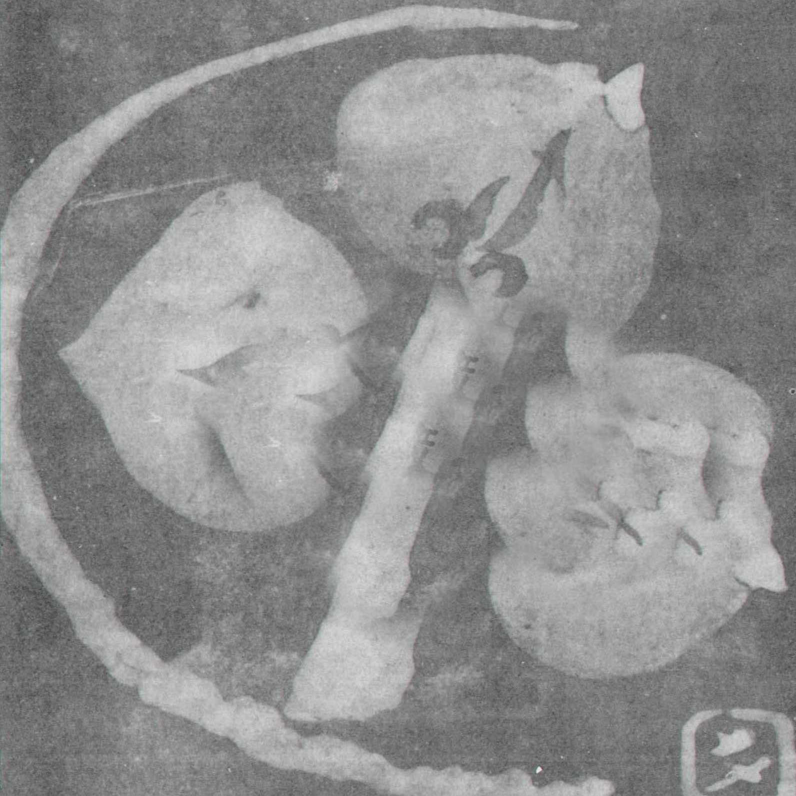
武將列傳 六

海音寺潮五郎

列傳 六



海音寺潮五郎

武将列傳 六

昭和三十八年十二月二十日　発行

定価　三八〇円

著　者　©海音寺　潮五郎

発行者　小　野　詮　造

発行所　文藝春秋新社
東京都中央区銀座西八ノ四

印刷　凸版印刷
製本　矢嶋製本

目次

竹中半兵衛　五
徳川家光　四一
勝　海舟　九七
あとがき　二一九

題字　杉本健吉
装幀　守谷多々志

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

武將列傳六

竹中半兵衛

一

美濃の竹中氏は清和源氏であるという。美濃の清和源氏には二系統ある。多田満仲の弟満政の子孫と、満仲の子頼光の子孫だ。頼光の子頼国は美濃守となってこの国に在任中に国房を生み、国房はずっと美濃にとどまり、美濃ノ七郎と名のり、この子孫に土岐氏がある。満政の子孫も、頼光の子孫もこの国に蔓衍し、美濃源氏といわれているが、竹中氏はいずれの子孫であるかわからない。竹中氏の系図は半兵衛重治の祖父重氏以前は明らかでないのである。

重治の父遠江守重元は相当な人物であったらしい。今揖斐郡鶯村大字公郷は、昔は池田郡大御堂といった。美濃平野の北端に近く、揖斐川の左岸に位置する農村だ。ここが代々の竹中氏の所領地で、重元もここにいたのである。

重元の時代、この近くに岩手氏という豪族があった。岩手氏は「承久記」にその名前が出ているのだから、鎌倉時代から有名な豪族であった。関ケ原盆地への入口垂井町の近くに岩手という村があっ

て、そのへんの領主であった。岩手村の西方に岩手山、一名菩提山という山があり、観世音菩薩を祀り、美濃巡礼第十六番の札所（ふだしょ）になっている。この山に城があって、岩手山城または菩提山城と呼ばれて、岩手氏の居城となっていた。

永禄の頃とだけあるが、後におこる事件と考えあわせると、初年、少くとも三年の織田信長の桶狭間合戦直後あたりまでのあいだであろう、竹中重元は、この城を攻め、城主岩手弾正を追って、城を乗りとり、自らの居城にした。（新撰美濃志）

同じくこの書によると、竹中氏は重元の時から、稲葉山城の斎藤氏の被官となったというが、それは大体この頃からではなかったかと思う。つまり、人の城を強奪したのを認可してもらうために所属を申しこんだというわけ。証拠があって言っているのではないが、当時の小豪族の生態として、いかにもありそうなのである。

重元は、岩手山城の奪取後、間もなく死んだらしい。長く生きていられては、次の話が展開しない。半兵衛重治は重元の長男で、従って竹中家をついで当主になったのだが、一応彼の年齢をしらべてみよう。彼は天正七年に三十六で死んでいるから、逆算すると、天文十三年の生まれである。すなわち、桶狭間合戦のあった永禄三年には十七歳ということになる。

甫菴太閤記に、重治十九歳のこととして、こんなことを記載している。

半兵衛は顔立がやさしく、心ばえが大様（おおよう）で、細事に拘泥しなかったので、世の人々は武辺の心がけなどさらにない、柔弱な性質であると侮っていた。半兵衛はこれを憤り、

「さらば、おれが武辺のほどを見せてくれむ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

と、策をめぐらして、謀叛をおこし、稲葉山城を独力をもっておとしいれたと、その次第をのべている。織田軍記の記述も同じだが、これは甫菴太閤記を踏襲したのだから当然である。

この記事を、新井白石も藩翰譜で踏襲しているが、白石は更に一説として、美濃士の黒田孫右衛門という者が白石の師の木下順庵に語った事を伝えている。それはこうだ。

半兵衛は少年の頃から読書が好きであったばかりでなく、柔弱・愚鈍に見られたので、主人の斎藤竜興は軽侮して、ややもすれば無礼をはたらいた。そのため、竜興の近習の者共も半兵衛を軽く見て、おりにふれては侮蔑的な言動をした。一体この時代は偏武的で、殺伐な気風が横溢していて、男は強剛な上にも強剛、激烈な上にも激烈であるをよしとしたのだ。小田原北条氏の家中でのことだが、ひげの薄い男が、「ひげなし」と言われて大腹を立て、相手を斬ったという時代だ。「ひげなし」とは「女のような顔をしている」という意味だ。男たるものはたえず煮えたぎっているようなはげしい気概を持っているべきものと、皆が考えていたのだから、やさしい顔をして、公卿や坊主のように学問を好んで書物ばかり読んでいるのさえ、武士にあるまじきことと思われるのに、大ていなことには無感動を装っている悠然たる半兵衛の風格が柔弱、男にあるまじきことと軽蔑されたのは最も自然なことであったろう。人の態度にもはやりがある。

十九の時、半兵衛が稲葉山城に出仕して竜興に拝謁して帰るのを、櫓の上から見つけた竜興の近習共が、

「ほう、昼行灯どのがかえって行くわ」

「いつもうっそりとした顔をしとるのう」

「ああいうのを、ゆうべの夢のつづきを見ている顔というのじゃ」
などと言い合っているうち、よほどのお調子ものであろう、前をまくって、ちょうど半兵衛が真下に来かかるのをねらって、小便を飛ばしかけた。

半兵衛は怒りもし、おどろきもしたが、さわがぬていでおし拭い、一旦居城にかえった。すぐ舅（しゅうと）である安藤伊賀守の家に行った。

安藤は、稲葉一鉄（いってつ）・氏家卜全（うじいえぼくぜん）とともに、当時美濃三人衆と呼ばれて、大身でもあれば、武勇にもたけた人物である。なにごとであろうかと、迎えて聞くと、

「本日しかじかのことがありました。これはひとえに屋形が常々拙者を侮りなさるためでござれば、殿を襲撃して仕返しをしとうござる。縁につらなり給うことでござれば、ご加勢いただきとうござる」と言う。

安藤にとっては半兵衛は娘婿だが、少し足りない人がらだと思っている。こんなことを言われても、そうおどろきもしない。

（やれやれ、阿呆というものはしようのないもの。衆寡の勢いもはからず、一時の怒りに駆られて、夢のようなことを言うて来るわ）

と思いながら、そんな大それたことを考えてはならない、身の破滅でござるぞ、よそではそんなことを言うてはならぬなどと、懇々と教えさとして帰した。

以上、つまり動機だけが甫菴太閤記とちがうが、あとは同じである。おそらく、黒田孫右衛門氏の伝えた美濃地方の伝承の方が事実に近かろう。単に力量のほどを見せたいというだけで、とくべつな

動機もないのに謀叛を企てるとは思われないからだ。
次はいよいよ謀叛の実行だ。
半兵衛の弟で久作（重隆）というものがあった。人質として稲葉山城に送られていた。以前この久作が病気したことがあり、この頃はもうなおってしばらく経っていたのであるが、半兵衛はその病気が再発したと称して、看護のためという名目で、侍を久作につける許可を得て、六人城内に送りこんでおいて、その日の夕方、長持に具足や武器をいれ、雑人にかつがせ、侍十人ほどをつれて、自ら宰領して登城した。織田軍記によると、三月十八日のことであったというが、これはあてにならない。
「この長持には、弟の病気を見舞いに来て下さる人々をもてなすための酒や食べもの類が入っているのでござる」
と、門毎に言って通った。
このようにして本丸まで入って久作の住いにつき、夜ふけを待って長持をひらき、具足を出し、ひしひしと着こんだ。半兵衛と家来十六人、すべてで十七人だ。
半兵衛は先ず広間に行ってみると、その夜の番頭斎藤飛騨守以下、歴々の者が詰めている。
半兵衛はつかつかと飛騨守に近づき、
「ご上意候」と大喝するや、斬りつけた。
「心得たり……」
飛騨守は抜き合わせたが、たたみかけて斬りかかる半兵衛の切先の鋭さに二つになってたおれた。
居合わせた人々はおどろきあきれ、総立ちになった。

そこに十六人の者共が斬りこんでくる。
大混乱だ。
人々、あわてふためきさわいだが、よもや十六七人の小人数の狼藉であろうとは思われない。近国の然るべき大名と手はずを合わせて潜入して来たと思って、度を失った。十七人はここかしこに散ってさわぎ立てては斬ってまわった。人々は益々おびえて、討たれる者が多数であった。
そのうち斬込隊の一人竹中善左衛門というものが鐘楼に走り上って鐘をつき出した。月の夜空をどよもして殷々と鳴りひびく鐘の声に、城中益々おそれていると、かねて合図をしめし合わせていた半兵衛の手の者がひしひしと駆けつけてくる。半兵衛の舅の安藤伊賀守も、
「すわこそ、あの阿呆殿がやった！」
と、兵をひきいて駆けつけてきた。安藤がどんなつもりで駆けて来たか、取りおさえて自分には関係のないことを立証しないと身の破滅であると考えたのか、始めた以上仕方はない、行動を共にするより助かる術はないと考えたか、そこのところはわからないが、ともかく駆けつけて来た。
城主竜興は歯がみをしてくやしがりながらも、水門をくぐってやっと城外に逃げた。
こうして、稲葉山城は半兵衛の手に帰した。
この話を聞いて、信長が半兵衛のところに使いを出し、
「稲葉山の城をわれらに渡されよ。さすれば、美濃半国を貴殿にあてがい申そう」
と書状をつかわしたところ、半兵衛は、
「この城は当国の領主の居城でござる。他国の人に渡し申しては、人の批判もいかがと存ずる」

ところわり、間もなく安藤をなかにたてて、城を竜興にかえし、浪人して近江に立ちのいたというのだ。

どの程度までこの話を信じてよいか、わからないのであるが、元禄の頃まで美濃地方で信ぜられていた話であることは、白石の記述でたしかである。

二

近江に立ちのいたといっても、住所を近江に移し、斎藤氏の被官をやめたというだけで、岩手の所領も、城も、所有権を放棄したわけではなく、それはやはり保持して、弟の久作はじめ一族のものが守っていたのであろう。

半兵衛としては、どんな理由からにしても、一旦謀叛したのだから、斎藤家と主従の関係をつづけるわけにはいかない、また同じ国にいるのも道義上よくない、しかし、領地や城は斎藤家からもらったものではなく、父祖が自分の力で切取ったものであるから、これは保持していてもさしつかえはないという理窟だったのではないかと思うのだ。このような筋道の立て方が、当時の武人としては出色に学問が好きで、常に読書をおこたらなかったと伝えられている半兵衛にはふさわしいもののように、ぼくには思われるのである。岩手と近江境とは、わずかに八キロしかはなれていないことも考慮に入れるべきであろう。

ところで、近江ではどこに住いをかまえていたのであろう。絵本太閤記は史実的には全然あてにな

らない書物だが、これには栗原山（くりはらやま）に閑居していたとある。栗原山とはどこだか知らないが、栗原郷なら、関ケ原役で有名な南宮（なんぐう）山の東方の山麓の部落である。そこから南宮山に少し分け入ったあたりを想定しているのかも知れない。しかし、ここは岩手から近くはあるが、美濃の内だ。近江ではない。岩手から西方二里くらいの藤川・上平寺のあたりだと近江国内であり、伊吹山の南麓地帯で、生涯、隠者の生活にあこがれを持っていたとしか思われない半兵衛にふさわしい場所だと思われるのだが、小説ではないから、そうきめるわけには行かない。要するに、岩手からあまり遠からぬ近江のある場所に閑居していたのであろう。

　再び半兵衛の名が歴史の上にあらわれて来るのは、稲葉山城乗っとりから八年後の元亀元年である。歴史はこの八年の間に大変化をしている。

先ず、美濃が織田信長にうばわれ、斎藤竜興は江州に追いおとされ、稲葉山城は信長のものとなり、岐阜城と改名された。この斎藤氏の滅亡直後あたりに、竹中氏は信長に帰服している。半兵衛の舅の安藤伊賀守ら美濃三人衆は斎藤氏のほろびる前には信長に帰服して、斎藤氏をほろぼすに働いているから、安藤が中に立って半兵衛を口説いたのであろう。

　しかし、半兵衛が隠者生活をやめて織田家のために働いたのか、織田家のために働くのは久作以下の一族のものにまかせて、彼自身は隠者生活をつづけていたのか、はっきり記したものはない。ぼくの想像を言えば、後者である。

　さて、信長は美濃を手に入れ、岐阜に居城をうつすと、京都にむかって野心を研（と）ぎ、京都への進路をひらくために江州小谷（おだに）の浅井氏と和親し、妹のお市を浅井家の当主長政に縁づけた。当時江州は南

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo